

オデュッセイア（一）

ホメーロス輪讀會

第一の歌

あの男のことを私に語れよ、ムーサよ、智慧の多い男
のことを、彼は何回も何回も

その道を逸らされた、トロイエーの聖なる市を略奪して
から

人間たちの多くの町を見そして心を彼は知つた、
そして彼は海で多くの苦難を彼のその心に被つた、
己が命と仲間たちの生還を得むとして。

だがそのやうにしても仲間たちを救へなかつた、願つた
のだが

といふのは彼ら自らの愚かさの所爲で彼らは滅びた、

5

馬鹿な者たちは、彼らは上に照るもの太陽の牛を
平らげた、それで太陽は彼らの歸還の日を奪つた。
それらのどの點からでも、女神よ、ゼウスの御娘よ、私
たちに語つて下さい。

今や他の全ての者らは、険しい破滅を逃れた限りは、
家にゐた、戦さをも海をも逃れて

だが彼一人を、歸郷を願ひ妻に戀つてゐる者を、
女主ニユムペーがカリユプソーが引き留めてゐた、女
神たちの中でも美しいものが、

中を剝つた洞穴に、夫になることを望んで。

だが時が回り回つて年がやつて來た時、

その時彼に神々は運命つけた家へ歸るやうに

15

10

イタハケーに、そこでも面倒事から逃れられないにして
も

彼の身内の間でさへも。神々は皆哀れんでゐた
ポセイドアーン以外は。彼は絶えず怒つてゐた

神に匹敵するオデュッセウスを彼の土地に着く迄。

だが彼は遠くに住むアイテヒオペスらを訪れた、

アイテヒオペスらを、彼らは二つに分れてゐた、人々の

うちで一番遠くに住む彼らは、

片方はヒューペリオンの沈むところに、もう一方は昇る

ところに、

牡牛らと羊らとの大犠を受けて。

そこで彼は宴席に坐して楽しんでゐた。だが他の神々は

オリュムポスなるゼウスの宮殿内で坐してゐた。

そして彼らに人間らと神々との父が言葉を始めた、

といふのは心の内で批の打ち所のないアイギストスを思

ひ出したから、

彼をはアガメムノニデーアの遠くまで有名なオレステー

スが殺した、

彼のことを思ひ出して彼は言葉を不死なるものらの間に

言ひ掛けた、

「おゝ何といふことだ、何と今や神々を死すべきものらは

非難することか。

つまり我々から始つて悪があると彼らは言ふ、だが彼ら

30

25

20

自身が

彼らの愚かさの故に定めを越えて苦しみを持つのだ、

恰も今し方もアイギストホスが定めを越えてアトレイデ

ースの

婚姻による妻を娶り、そして歸還した彼を殺した、

険しい破滅を知りながら、我々が豫め彼に言つただか

ら、

ヘルメイアースを派遣して、よく物を見るアルゲイポス

ンテースを、

彼を殺さぬやうに又その妻を口説かぬやうに、

といふのはオレステースから復讐があるだらうからアト

レイデースから、

彼が成人し彼の土地を求めるとき。

このやうにヘルメイアースは言つた、だがアイギストホ

スの心を

得なかつた善かれと思つたのだが、そして今やすつかり

全部を彼は支拂つたのだ。」

彼にするとその時答へた燦めく眼のアテーネーが、

「おゝ私たちのお父さんクロニデーアよ、統治者の中の最

高のお方よ、

確かにあの男は相應しい破滅によつて横たはつてゐる、

そのやうに死にますやうに他の誰でもそのやうに振る舞

ふものは。

45

40

35

だが私の心は賢いオデュッセウスのために苦しむ、
不運な男のために、彼ときたら親しいものから遠くで災
難を被つてゐる

潮に巻かれた島で、そこに又海の膺がある。

樹の茂る島、そこに女神が家居してゐる、

兇々しい心のアトラーズの娘、彼は海の

すべての海の深みを知る、そして自ら支柱を保つ

大きい支柱を、その柱は大地と天とを互ひに分つ。

彼の娘が惨めな悲嘆に暮れるものを引き留めてゐるので

す、

絶えずなだらかなまるめこむ言葉で

働き掛けて、イタハケーを忘れるやうに、だがオデュッ

セウスは、

立ち昇る煙だけでも見たいものと願つて

彼の故郷の煙を、一層死にたいと思つてゐる。だが決し

てあなたは

その心に願みない、オリュムポスなるものよ、一體オデ

ユッセウスは

アルゴス人らの船の傍らで犠牲を執り行つて喜ばせませ

んでしたか

廣々としたトロイエーで？ 何故いつたい彼にそんなに

怒つておられるのですか、セウスよ？」

すると彼女に答へて黒雲を集めるセウスが語つた

60

55

50

「私の子供よ、何といふ言葉がお前の齒の垣根を逃れ出る
のか。

どうしてこの私が神のやうなオデュッセウスを忘れてよい

ものか、

彼は智慧にかけては死すべきものを越えてゐる、そして

誰にも増して犠牲を神々に

不死なるものらに供してゐるではないか、廣々とした天

を所持してゐるものらに？」

だがポセイダーオンのガイエーオコホス地を揺すぶるものがいつも絶え

ることなく

キユクローポスのことで怒つてゐる、彼をその目を彼が

言にした、

神に匹敵するポリュペヘーモスを、彼の力は最大である

すべてのキユクローペスの中で、ニユムペヘーのトホーオ

ーサが彼を生んだ、

ポホルキューズの娘が、彼は不毛な海を支配してゐる、

中を割つた洞穴でポセイダーオンと交つて。

それ以來オデュッセウスをポセイダーオン「エノシクフ

トホーンは

決して殺しはしない、だが祖國への道から逸らした。

だがさあ私たち皆はこの彼のために取りはからはう

歸還を、歸られるやうに、ポセイダーオンも捨てるだ

らう

75

70

65

彼の怒りを

といふのはすべてに逆らふことは出来ないだらうから
すべての不死なる神々に逆つて獨りで争ふことは」

すると彼にその時答へた女神燦めく眼のアテヘーネー
が

「おゝ私たちのお父さんクロニデーヌよ、統治者の中で至
高なる方よ、

もし本當に今そのことが祝福された神々に好ましいのな
ら、

智略に富んだオデュッセウスが彼の家に歸ることが、
それではヘルメイアースを、走り手アルゲイポホンテ
ースを、

オーギュギーエの島へ遣はしませう、いち逸く
美しい巻き毛のニユムペヘーに誤ることのない謀り言を
言つやうに、

心のしつかりしたオデュッセウスの歸還を、彼が歸られ
るやうに。

そして私はイタハケーに行きませう、彼の息子を
もつとしつかりさせるやうにそして自分の胸の中に性根
を据ゑるやうに、

髪を長くしたアカハイア人らを集會に召集するやう
に

すべての求婚者たちに言ひ切るやうに、彼らときたらい

90

85

80

つも彼の

群れる羊を咽喉切りまた足を回らす角の曲つた牛たちを
咽喉切つてゐる、

そして遣はさうスパルターにそして砂がちのピュロスに
己の父の歸還について聴き込むために、聽かれるなら、
そしてよい評判が人々の間で彼のものであるやうに。」

このやうに言つて足に美しいサンダルを穿いた、
神のものなる金の、それは彼女を運ぶ海の上をも
又無限の陸の上をも風の息とともに。

そして頑丈な槍を握つた、鋭い青銅の穂先をした、
重く大きく強い、それで以て彼女は男たちの戦列を滅ぼ
す

勇士らの、その者らにオブリモパトラー強力な父を持つものが怒りを覺える
やうな。

そしてウーリユムポスの峯々から矢のやうに降りて行つ
た、

そしてイタハケーの國のオデュッセウスの外門のところ
立つた、

中庭への入り口に、そして手に青銅の槍を握つた、
旅人に似せて、タポホス人らの指導者メンテースに。

そして不敵な求婚者たちを見出した、彼らはその時
扉の前で駒遊びペッサンで心を樂ませてゐた、

牛の皮に坐つて、その牛たちを彼ら自身が殺した。

105

100

95

そして彼らの傳令使たちまた機敏に動く従者たちが
ある者らは酒と水とを攪酒器クシヤルの中で混ぜた、

110

ある者らは又孔の澤山あるスポンジで卓子を
洗つたそして前に置いた、そして彼らは肉を澤山切り分
けた。

すると彼女を眞先に見た神に似たテーレマコホスが
といふのは求婚者らの間に己が心を痛めながら坐つてゐ
たから

115

優れた父を心の中に見ながら、何處かからやつて来て
家中のこの求婚者らの退散をさせないか、

そして自身は名譽を保有し自分の財産を支配しないか。

こんなことを考へて求婚者らの間に坐つてゐてアテヘー

ネーを見た、

それで彼は眞直ぐに扉の前に歩んだ、そして心に恥ぢた
異郷人を長く扉のところ立たせたことに、そして近く
立つて

120

右手を取つたそして青銅の槍を受け取つた、

そして彼女に聲を出して翼のある言葉語り掛けた、

「よつこそ、異郷の方、私どものところであくつろぎ下さ
るやう、そしてそれから

御馳走を味はつてから必要なことを仰言つて下さい。」

このやうに言つて案内した、すると彼女はついて来たバ

ルラス＝アテヘーネーは。

125

そして彼らが棟の高い家の内に入った時、
槍を彼は運んで来て大きい柱に立てた

好く削られた槍立ての中に、そこには他の

氣丈なオデュッセウスの槍が澤山立てられてゐた、

そして彼女を座席に導いて坐らせた、下に敷物を擡げて、

美しい精巧に織られた、下には足臺があつた。

そして傍らに彼は綺羅を盡した安樂椅子を置いた、他か
ら離れて

求婚者らから、異郷の人が騒音で惱まされて

食事を攝れなくなつたやうに、不作法者どもの間に入

り込んで、

そして彼から行つてしまつた父について訊きたいと思つ

たから。

手洗ひ水を侍女が水差しに入れて持つて来て注いだ

美しい金の水差しに、銀の水盤の上へと、

洗ふために、そして傍らに磨かれた卓を整へた。

するとパンを威嚴のある女中頭が持つて来て脇に置いた、

澤山の御馳走を上置きに置いた、蓄への中から喜んで持つて

来て、

そして切り分け係が肉の皿を持ち上げて傍らに置いた、

いろいろな種類の肉の、そして彼らの傍に金の杯を置い

た、

そして傳令使が彼らのために屢々酒を注いで廻つた。

140

135

すると不敵な求婚者たちが入つて来た。彼らはそれか
ら

順番に安樂椅子や椅子に坐つた。

すると彼らのために傳令使たちが水を兩手に注いだ、

そして女奴隷たちが籠にパンを積み上げた、

そして若者たちが攪酒器クレシテルを飲み物で滿杯にした。

すると彼らは準備され眼前に並べられた御馳走に兩手を

出した。

そして飲み物と食ひ物との欲を追ひ拂つてから

求婚者たちは、彼らの心の中で他のことが關心事であつ

た、

歌と踊りとが、それらは饗宴の添へ物であるから。

さて傳令使が手にとても美しい豎琴キタリリスを渡した

ペーミオスの、彼は仕方がなく求婚者らの傍らで歌ふ

のだった。

いや全く彼はポホルミンクスで伴奏しながら上手に歌ひ

始めた。

するとテーレマコホスは燦めく眼のアテヘーネーに語り

掛けた、

頭を近くに持つて行つて、他の者どもが聴かないやう

に、

「親しい異郷の方、私が言ふことで私をお怒りになるでせ

うか？

155

150

145

これらの人々にはこんなことが關心事なのです、豎琴と
歌と、

いい氣なもので、他人の生活資材を埋め合はせもなしに

彼らは食べてゐるのですから、

あの人の、その人の白い骨が雨で腐れ

陸に横たはり、あるいは波が海の中で轉がしてゐる。

もしあの人がイタハケーに歸つて来るのを彼らが見たな

ら、

皆は足がもつと迅いのを祈るであらう

金や着物やで裕福なよりは。

今や彼がこのやうに悪い定めを死んだので私たちに何も

慰めはない、たとえこの地面の上の人間のうちの誰かが

彼が還つて来るだらうと言つても、彼の歸還の日は失は

れた。

ところでさあ私にこのことを言つて下さいそしてはつき

り仰言つて下さい、

あなたは一體人間のうちのどなたですか？ どこにあな

たの市がそして親御さんが？

どんな船に乗つていらしたのですか？ どんな風に船乗

りたちはあなたを

イタハケーに連れて來たのですか？ 彼らは誰だと名乗

つたのですか？

と申しますのはどうしたつてあなたが徒歩でここにお出

170

165

160

では思ひませんから。

それから私にこのことをも正確におつしやつて下さい、
私がよく知るやうに、

初めてお訪ね下さつたのですか、それとも父の

お客ですか、大勢の人が私たちの家に来るものですか
他にも、あの人は殊に人々との交際が廣かつたものです
から、

すると彼にまた答へた女神燦めく眼のアテヘーネー

が

「それでは私はあなたにかついふことどもを全く正確に言
ひませう。

智慧の多いアンキヒアロスの息子メンテースであると

申します、そして權に親しむタハポス人らを治めてゐま
す。

今回はここに船と仲間らと共にやつて來ました、

葡萄酒色の海を帆走して轉つらふ外國人のところへ、
テメセーに銅を求めて、そして鐵を持つて行きます。

私の船はあそこに停泊してゐます野の傍らに市から遠く、
レイトホロンの港に、森の繁るネーイオンの麓に。

また我々は父祖の代から互に客であつたと申し上げます

よ

始めからの、何なら行つて老人にお尋ねになるとよい
勇士ラーエルテースに、その彼はもはや市に來ないと

175

人々は言ふ、いや遠く野で苦しみを受けてゐると言ふ
年取つた召使女と、彼女は彼のために食へ物と飲み物と
を

傍らに置く、彼を疲れが四肢を捉へた時

葡萄酒に適した葡萄園の日だまりを歩き廻つた後。

さて私は來ました、といふのは彼が國に歸つてゐると聞
いたから、

あなたのお父さんが、だが今や彼を神々が道を遮げてゐ
る。

つまり神のやうなオデュッセウスは決してこの地上で死
んでゐないぞ

まだ生きて廣い海で引き留められてゐるのだ、

潮が周りに流れる島の内に、そして無慈悲な人々が彼を
引き止めてゐる、

野蠻な人々が、彼らは不本意な彼を引き留め續けてゐる。

だが今お前に私は豫言しよう、心に

不死なるものらが投げ込んだ通りにそしてその通りに成

就されると私は思ふ、

私は豫言者ではないし鳥のことをはつきり知つてゐるわ
けではないが、

まことにもはや長くは己の祖國から離れては

彼はゐないだらう、鐵のきつなで繋がれても離れてはゐ
ないだらう、

180

200

195

190

歸られるやうに企むであらう、智慧の多い人だから。

だがさて私にこのことを言ひそして正確に語つて下さい、
もしやこんなに立派だが彼オデュッセウスのお子さんか。

大層顔立と美しい眼が彼に

似てゐる、それほど屢々我々は互ひに附合つたのだから、
彼がトロイエーに向けて出帆する前は、その時は他のも
のら

アルコス人らの中で最も優れた者たちが中空の船で行つ
た

それ以来私はオデュッセウスを見ないし彼も私を見ない。」

すると今度は彼女に賢いテーレマコホスが面と向つて

言つた、

「では私があなたに、客人よ、すつかり正確に申しませう。

母は、私に彼の子であると言ひます、だが私としては

知りません、といふのは誰も彼の生れを自分では知らな

いからです。

本當に私がある祝福された男の息子で

ありますやうに、彼を老齡が財産の上に引き受ける。

さて彼は死すべき人間の中で最も不運なものです、

その人から私は生まれたと皆は言ひます、このことをお

尋ねだから。」

すると彼に再び語り掛けた女神燦めく眼のアテヘーネ

ーが

220

215

210

205

「まことあなたに名もない生れを神々は今後のこととして
置かなかつた、あなたをそのやうにペーネロペイアが生
んだのだから。」

さあ私にこのことを言ひなさいそして正確に語るのだ、

何の饗宴ですか、そして何の騒ぎですかここにゐるの

は？ 一體何であなたにこんな必要があるのですか？

招待宴ですかそれとも婚禮ですか？ これは持寄り宴で

はないのだから、

そのやうに傲慢無禮に家中で

どんちゃん騒ぎをしてゐるやうに私には思へる。男は怒

るでせう

このひどく恥曝しなを見て、誰にせよ感覺を持つてあ

る人が入つて來たら。」

すると彼女に再び賢いテーレマコホスが顔を上げて言

つた

「客人よ、あなたがそれらのことを私に尋ね訊かれるから、
かつてこの家は裕福であり批の打ち所がなかつた

やうです、まだあの人が人々と一緒に居た時は、

だが今や別様に神々は邪惡に企んで望んで居られる、
彼らはそれ以上に全てのの人々に彼を見え

なくした、彼が死んでもこんなに困らないでせう、

もしもトロイエーの國で彼の戦友の間で殺されても、

あるいは親しいものの腕の中で、戦争をしてゐるのです

235

230

225

から。

その時は彼の墓をすべてのアカハイア人らが造つたらう、そして彼の子供のために大きい名譽を彼は後に得たらう。今は彼を音信もなくハルピユイアイが連れ去つた、見えず音沙汰もなく去つた、そして私に苦痛と悲嘆とを殘した、それに私は彼を泣いて悼んであるだけではない、彼のことだけを、今や私に神々は他の面倒を齎したのだから。

といふのは鳥々を支配する限りの貴族たちが、ドウーリキヒオス島とサマー島と森が繁るザキユントス島とを、

あるいは巖がちなイタハケーをすっかり治めてゐる限りのものが、それらすべての人々が私の母に求婚し、家を食い潰してゐます。

そして彼女はおぞけ立つ結婚を断りもせずまた結着をつけけることも出来ず、すると彼らは食へて食へ盡してゐます

私の家を、間もなく破壊することですつ私自身をさへも。

すると彼を堪えがたく可哀想に思つて語り掛けたバルラス・アテヘーネーが
「おお何といふことだ、行つてしまつたオデュッセウスが大

240

245

250

いに

あなたには必要だ、彼が恥知らずな求婚者らに両手を掛けるでせう。

つまり今入つて来て家の外門に

立つたなら、兜を被つて楯と二本の槍を持つて、

そんな風であつた彼を私が最初に見た時は

私たちの家で酒を飲み楽しんでゐる時、

エビヒユレーからの歸途で彼はあつたメルメリデースの

イーロスのところからの

といふのはあそこにも速い船に乗つてオデュッセウスは行つたのだ

人を殺す薬を探して、彼のために出来るやうに

青銅の鏃の矢に塗ることが、だが彼は彼に

與へなかつた、永遠にぬます神々を恐れながら、

いや私の父が彼に與へた、とても好いてゐたから、

そのやうに彼はあつて求婚者らに立ち向かふであらうオ

デュッセウスは、

全員は速く死ぬものらは嚴しい婚姻を遂げるものらにならう。

だがこれらは神々の膝の中に置かれてゐる、

歸還して復讐するだらうか、しないだらうか、

彼の家の中で、だがあなたに考へるやうに命ずる、

どのやうに求婚者らを邸から逐ひ出すか。

255

260

265

さあ今は耳を貸しなさいそして私の言葉を聴くのだ

明日集會にアカハイア人らの勇士らを招集して

皆に言葉を言ひなさい、神々に證人になつていただけ

求婚者たちに自分のところへ解散するやう命じなさい、

そしてお母さんは、もし彼女の心が結婚の方に傾いてあ

るのなら、

大いに力のある父親の邸に歸らせなさい、

さうすればあの人たちは結婚を整へ持參金を準備するだ

らう

とても多くの、愛しい子供に附けるのに相應しいほどの。

さてあなた本人にしつかりと忠告しよう、もしあなたが

聴くのなら、

二十人の漕ぎ手のある船を準備して、いづれにしても一

番いい船を、

行きなさい長い前に去つて行つた父の消息を尋ねて、

あるいは死すべきものの誰かがあなたに言ふであらう、

あるいは噂を聞くであらう

ゼウスから、噂は最もしばしば人間に消息を齎す。

眞先にピュロスに行きなさいそして神のやうなネストー

ルに尋ねなさい、

そしてそこからスバルテーに金髪のメネラーオスのとこ

ろに、

彼は最後に來たのだから青銅の鎧を着たアカハイア人ら

285

270

の中で。

もしお父さんの生きてゐることそして還つて來ることを

聞いたなら、

さうすれば實際酷い目に遭ひながらももう一年我慢で

きよう、

もし死んだことを聞いたならもはやぬないことを、

その時は懐かしい父祖の地に還つて來て

彼の墓を築きそしてその上で葬らひをすること

手厚く、彼に相應はしいかぎりに、そして男にお母さん

を與へなさい。

そしてこれらのことをあなたが果し成し遂げたなら、

その次は胸と心でよく考えなさい、

どのやうにしてあなたの邸中の求婚者らを

殺さんかあるいは計略によつてあるいは正面から、あな

たは決してしてはならぬ

子供つばいやり方を攝ることを、もうあなたはそんな齡

ではないのだから。

あなたは知らないのかどのやうにして神のやうなオレス

テースが名聲を得たか

全ての人間の中で、父殺しを殺したから、

企みに長じたアイギストホスを、彼が彼の名高い父を殺

した？

あなたも、親しいあなたも、といふのはとても私にはあ

295

290

300

あなたが優れて大きく見えるからだ、

あなたは屈強だ、だから後に生れて来る誰かもあなたをよく言ふであらう。

だが私は速い船にもつ戻らう

そして仲間のところに、私を待つてじりじりしてゐる、

さてあなた自身に氣をつけなさい、そして私の言葉を心に留めなさい。」

すると彼女に今度は賢いテーレマコホスが顔を擧げて

答へた、

「客人よ、誠にこれらのことをよく心して話して下さい、父がその子供に話すやうに、私は決してそれらを忘れません。」

しかし今はもう少しお待ち下さい、道をお急ぎだけれど、沐浴をして御自分の心を喜ばせたら

贈物を持つて船に行かれるやうに、心に喜んで、

貴重な、とても美しい、それはあなたの寶になるでせう私からの、親しい友が友に與へるやうな。」

すると今度は答へた女神燦めく眼のアテヘーネーが、

「もつ引き止めないで下さい、道を急ぐのですから」

私に與へよと御自分の心が命じる贈物は、

再びやつて来た時に下さるやうに家へ持ち歸るべく、

そしてとても好いものを選んで下さい、あなたに充分なお返しがあるでせう。」

315

310

305

彼女はこのやうに言つて立ち去つた燦めく眼のアテヘーネーは、

鳥のやうに上方へ飛んで行つた、そして彼の心の中に勇氣と力強さを置いた、そして彼に父のことを思ひ出させた

以前よりも更に一層、そして彼の胸に知つて心の中で驚いた、神であつたと知つたから。

そして忽ち求婚者たちのところへ行つた神に等しい男は、

さて彼らのためにとても高名な歌ひ手が歌つてゐた、そして彼らは靜かに

聴きつつ坐つてゐた、さて彼はアカハイア人らの歸還のことを歌つてゐた

痛ましい歸還を、トロイエーからのそれをバルラスIIアテヘーネーが謀つた。

それを上の部屋から心に留めて聴いた神品の歌を

イーカロオスの娘が、とても賢明なペーネロペイアが、そして彼女の家の高い階段を降りて来た、

一人ではなかつた、彼女の後に二人の侍女が従つた。

それでその時彼女が求婚者たちのところへ姿を現した女たちの中で女神のやうな女が、

丈夫に造られた屋根の柱の傍らに立つた、

顔の前につやつやしたヴェールを下ろしたままであつた。

330

325

320

そして彼女のそれぞれの側には忠實な侍女が立つた。
そしてその時涙を流しながら彼女は神々しい歌ひ手に言
つた、

「ペーヘミオスよ、あなたは他に澤山人をうつとりさせ
るものを御存知なのだから

男たちと神々との業を、それらを歌ひ手たちが有名にし
た、
その中の一つを坐つて彼らに歌ひなさい、そして彼らに
靜かに

酒を飲ませなさい、そしてその歌は止めなさい

その悲惨な歌は、それはいつも私の胸の中のこの心を
締めつける、私に最も忘れ難い苦しみが来るから。

といふのはそのやうな頭をいつも想ひ出しては戀してあ
るのです

そのやうな男の頭を、彼の名聲はヘルラース一帯にそし
て中央アルゴスにあま凡ねいのです。」

すると彼女に今度は賢明なテーレマコホスが語りかけ
た、

「私のお母さん、一體どうしてこの信頼出来る歌ひ手をお
叱りですか

心が彼に命ずるやうに楽しませるのを？ 全く歌ひ手た
ちが

責めあるのではありません、いや全くゼウスに責めはあ

345

340

335

るのです、あの方がお與へです
日々の糧に追はれてゐる人間たちに各々にお望みの通り
に。

この人には咎はないダナオイらの悪い定めを歌つたと
て、

といふのは人々はさういふ歌ほど譽めそやすのだ、
何でも兩耳に最も新しくやつて來た歌を。

そしてあなたの心と氣持とは聴くのに堪えるやうに、
といふのはオデュッセウス一人だけが歸還の日を失つた
のではない

トロイエーで、大勢の他の人々も行方不明になつてゐる
のだ。

さあ部屋に歸つて御自身の仕事をなさい、
機と絲紡ぎ棒とを、そして侍女たちに命じなさい

仕事に勵むやうに、言葉は男どもに關わる
すべての男たちに、取り分け私に、私のものであるから

家の中の權力は、
彼女は驚いて部屋へ歸つて行つた、

といふのは子供の賢い言葉を心に置いたから。
召使ひの女たちと共に階上に登つて行つて

それからオデュッセウスを哭した、愛する夫を、彼女に睡
りを

甘い睡りを臉の上に燦めく眼のアテヘーネーが投げるま

360

355

350

で。

さて求婚者たちは陰を引く廣間で沸き立つた、皆が望んでゐた寐床で添寝することを。

そこで彼らに賢いテーレマコホスが言葉を始めた、

「私の母の求婚者方々よ、傲慢な勝手氣儘をお持ちの方々よ、

今は御馳走を食べて楽しみませう、騒々しく

しないで、それは素晴らしいことだから歌ひ手に耳を傾

けることは

このやうな人にこの人がさうであるやうな、聲に於て神々に似てゐる。

曙にアゴラに行つて坐りませう

皆で、あなた方に忌憚のない言葉を言ひませうから、

邸から出て行つて下さいと、そして他の御馳走を食べら

れるやうにと、

あなた方の財産を食べて、家々を取り換えて。

もしあなた方にそれがより好都合より好いと

思はれるなら、一人の男の生活資材を見返しなしに滅ぼ

すことが、

食べ盡くされよ、私は永遠に坐す神々にお縋りしよう、

もしかしてゼウスが仕返しの仕事をして下されようかと、

その時なすところなくあなた方は家の中で亡びるでせ

375

う。」

このやうに言つた、すると皆は齒を唇に當てて

テーレマコホスに驚いた、彼は大膽に言つたものだ。

すると彼に今度はアインティノオスが語りかけた、エ

ウペイテースの息子が、

「テーレマコホスよ確かに君を神々自身が教へてゐる

高い調子の話し手であることを大膽に言ふことを。

君をクロニオンが海に圍まれたイタハケー中の王と

なさらないやうに、それは君に生まれついで世襲權で

はあるのだが。」

すると彼に再び賢いテーレマコホスが言ひ返した、

「アンティノオスよ、あなたは私が言ふことで私にお怒り

かもしれないが、

それでもゼウスが下さるならそれを私は受けたいと思ひ

ますよ。

あなたはこれが人間の中で最悪のことだと言ふのです

か？

いや王であることはちつとも悪いことではない、いち迅

く彼の家は

裕福になるであらうし自身もより譽れがあらう。

だがアカハイア人らの王は他にも居る

大勢居る海に取り巻かれたイタハケーには、若いものも

老いたるも、

395

390

385

380

彼らの中の誰かがそれを手に入れるのだらう、神のやう

なオデュッセウスが死んだから、

だが私は私たちの家の王であるだらう

そして奴隷たちの、彼らを私に神のやうなオデュッセウ

スが連れて来た。」

すると彼に今度はエウリュマコホスが、ポリュボスの

子供が、言ひ掛けた

「テーレマコホスよその通りださうしたことは神々の膝の中
に置かれてゐる、

誰かが海に取り巻かれたイタハケーでアカハイア人らに

王たらんか如何は？」

だから財産を自分でお前は持つてゐるがよいそしてお前
の家に主人であれ。

男がやつて來ることがないやうに、その誰かが力づくで

嫌がるお前を

財産を奪ふことがないやうに、イタハケーがまだ住まは
れてゐるうちに。

しかし私は希む、最も親しいものよ、客人についてお前

に訊きたい。

あの人はどこから來たのか、何處の土地の出身だと言つ
て

ゐるのか？ 彼の生れはそして先祖の土地は何處なの
か？

405

400

行つてしまつたお父さんの報せを持つて來たのが、

それとも彼の自分の仕事をしに來たのか？

あんなに急いで飛んで行つた、留まらなかつた

我々が知るやうに、と言ふのは見たところ賤しい人のや

うではなかつた。」

すると今度は彼に答へて賢いテーレマコホスが言つ
た、

「エウリュマコホスよ、確かに私の父の歸還は失はれた、

だからもう報せを私は當てにしない、どこから來ようが、

また神託も氣にかけない、母がそんなものを

家に易者を呼んで訊ねよう。

あの客人は私の父祖以來の知人タボホスからの人です、

メンテース賢いアンキヒアロスの息子であると

名乗つた、そして艫を漕ぐのが好きなタピヒオス人らを

治めてゐる。」

そのやうにテーレマコホスは言つた、だが心に不死な
る女神だと知つてゐた。

それで彼らは踊りと心を揺すぶる歌にと

轉じて楽しんで、そうして夕方がやつて來るのを待つた。

さて楽しんでゐる彼らに黒い夕方がやつて來た

するとその時それぞれは寢ようと家に歸つた。

するとテーレマコホスは、とても美しい中庭附きの彼の

部屋が

425

420

415

410

高く聳えて建つてゐるところ、とても景色がよい中に、

そこに行つた寐床に心に様々なことを想ひ患ひながら。

すると彼について燃える炬を持つて真心を抱く

エウリュクレイアが行つた、ペイセーノリデースのオー

プスの娘が、

彼女をかつてラーエルテースが彼の財と引き換へに得た。

まだうら若い娘であつた彼女を、そして二十頭の牛の價

を與へた、

そして彼女を愛する妻と等しく邸内で大事にした、

だが寐床でかつて交はらなかつた、そして妻の怒りを避

けた、

彼女が彼について燃える炬を運んだ彼を最も

侍女達の中で愛したのだ、そして小さかつた彼を育てた。

さて彼はしつかりと造られた部屋扉を開いた、

そして寐床に坐つた、そして柔らかな長着を脱いだ、

そしてそれを賢い老女の手に抛つた。

すると彼女はそれを長着を疊んで整へた、

孔の明いた寐床の傍の木釘に吊して

部屋から出て行つた、そして扉を把手で閉めた

銀の把手で、そして更に鍵を紐で締めた。

そこで彼は一晩中、羊の毛にくるまつて、

心に彼の旅のことを考へた、それをアテヘネーが指示し

た旅を。

440

435

430

第一の歌 了

第二の歌

さて早生れの薔薇色の指をした曙が現れた時、

臥床から起き上つたオデュッセウスの愛する息子は、

着物を着て、さらに鋭い劍を肩に置いた、

そしてつやつやした足に美しいサンダルを穿つた、

そして部屋から出て行つた神に引き較べられる様子で。

そして忽ち聲のよく徹る傳令使たちに命じた

招集することを髪の毛の黒いアカハイア人らにアゴラに

彼らは招集し、すると彼らはとても素早く集つた。

そして彼らが集合して一緒になつた時、

彼はアゴラに出掛けて行つた、掌に青銅の槍を持つて、

一人ではなかつた、彼と共に二匹の白い犬が従つた。

すると素晴らしい優美さを注ぎかけたアテヘネーは、

それで彼を全ての人々が入つて来るのを驚嘆して見た。

そして彼は坐つた父の席に、すると老人たちは席を譲つ

た。

すると彼らに勇士アイギュプトスが話し始めた、

彼は老いのために腰が曲つてゐたそして多くのことを知

つてゐた。

といふのは彼の愛しい息子が神に匹敵するオデュッセ

と共に

15

10

5

よい駒を産するイーリオスに中空の船に乗つて行つたか
ら、

槍使ひのアンティポホスだ、だが彼を兇暴なキュクロー
プスが殺した

割つた洞窟の中で、そして彼の最後の食事を調べた。

さて他に三人彼には息子がゐた、そして一人は求婚者た

ちに加つてゐた、

エウリュノモスは、そして二人は未だ父の仕事をしてゐ
た、

だがさうではあるが彼のことを忘れ兼ねて嘆きまた泣い
てゐた。

そして彼のことでは彼は涙を流して發言して言つた、

「今は私に耳を貸してくれ、イタハケー人らよ、私が言は
うことを。」

かつて我らの集會はなく、會も開かれなかつた

神のやうなオデュッセウスが中空の船に乗つて行つた日
から。

さて今は誰がこのやうに招集したのか？ 誰に關して必

要がこのやうに來たつたのか

あるひは若い人々のあるひはより年長である人々の？

それとも何か便りを聞いたのか還つて來る軍勢の、

それを我々にはつきり言つたらよい、いち早く聞いたの
だから？

20

それとも何か他の公事を知らせたい話したいと言ふの
か？

私には彼はいい男であるやうに見える、祝福されてるや
うに、どうか彼その人に

ゼウスがよい事を成就されんことを、何を彼の心に思つ
てゐるにせよ。」

このやうに言つた、すると縁起の良いその言葉を喜ん
だオデュッセウスの愛する息子は、

そしてもはや長く坐つてゐなかつた、そして發言しよう
と欲した、

そしてアゴラの中で立つた、すると標しの杖を彼の手に
渡した

傳令使ペイセーノールが、賢い智慧を知つてゐる人が。
すると彼は先づ老人に呼び掛けて話し出した、

「御老人よ、遠くはないその男は、御自分でもすぐにお
知りのやうに、

人々を招集した男は、私に苦しみが最も強くやつて來る。
何か還つて來る知らせを聞いたのではない、

それを私がいち早く聞いたのなら、私はそれを包まずあ
なた方に言ふであらう、

また何か他の公事を知らせたい話したいのでもない、
いや私自身の必要からです、私の家に兇事が落ちかかつ

てゐるのです、

25

40

35

30

45

二重に、一つには優れた父を私は失いました、彼はかつてあなた方に

ここにゐるあなた方に王であつた、そして父のやうに優しかつた、

そして今またさらにずつと悪いことが、それは急速に家全體を

全く破滅させ、財産をすつかり滅ぼすでせう。

私の母に求婚者らを取り憑きました望まない母に、

この人たちの愛する息子ら、ここに居られる最も優れた人々の、

彼らは父親の家に行くことを怖がつてゐる

イーカリオスの家へ、彼その人が娘に持參金を用意するであらうに、

そして誰にでも望むものに與へるであらうにとりわけ彼が氣に入つたものに

その彼らが私たちのところに毎日毎日入り浸つて、牛たちを羊をまた脂の乗つた山羊たちを殺して、

鱈腹食らひ輝く葡萄酒を飲んでゐる

滅茶苦茶に、それでこれらのものはすつかり食ひ潰されてゐる。といふのは男がゐないから、

オデユッセウスがさうであつたやうな、害を家から防ぐべく。

私たちは決してそんな風に護ることが出来ない、實際さ

55

うしたところで

我々は哀れなものでありそして抵抗を知らないものであるだらう。

それでも私は護るでせう、もし私に力が備はつてゐるなら、

といふのはもはや耐へられる事があるのではないから、そしてもはや明らか

私の家は壊れてしまつた、あなた方御自身も恥じられるがよい、

又近隣の他の人々を畏れられるがよい、

彼らは周りに住んでゐる、そして神々の怒りを怖れなさい、

ひよつとして惡業に怒られて振り向かれないやうに。

オリュムピオスなるゼウスとテヘミスとに掛けてお願ひする、

この女神は人間の集會を解散させたりまた着席させたりなさる。

堪へて下さい、友だちよ、そして私を一人にして置いて下さい、痛むべき悲しみに

呵まれるままに、もしかつて何か私の父強いオデユッセウスが
敵意を持つてよい臍當をつけたアカハイア人らに兇事を
なしたのでなければ、

70

65

60

そのことの私へのお返しに悪事をあなた方は悪意を以て働くことになる、

これらの人々を焚付けて。そして私にはまじらう
あなた方が財寶をも家畜をも食へ盡くす方が

もしあなた方が平げるならば、早急にその時は報復があるであらう、

といふのはそれ迄は町中を言葉で私たちは觸れ歩くだらう、

財産を返してくれと求めて、全てが戻される迄は、
今や癒しがたい悲しみをあなた方は私の心に投げ込んで、

このやうに憤つて言つた、そして地面に標の杖を擲つた

涙にくれながら、すると憐れみがすべての人々を捕へた、
その時他の者らはすべてしんとつた、誰も敢へて
テーレマコホスに荒い言葉を返すことをしなかつた

アンティノオス一人が彼に答へて言つた、

「テーレマコホスよ大膽なことを言ふものよ、氣をしつかり持て、何といふことを言ふのか

我々を辱めて、批難を張付けようと望んである。

君に少しもアカハイア人らの求婚者らは責任はない、
君のお母さんのせゐだ、彼女は特別に手管を知つてゐる。

といふのは既に三年である、直に四年にならう、

85

80

75

彼女がアカハイア人らの胸の中の心を不當に扱つてから、
彼女は皆に希望を持たせる、そして各々の男に約束する、
手紙を送つて、それでゐて彼女の心は他のことを考へてゐる。

そして彼女は他にもこんな企みを心に考へ回らす、
大きな機を邸に立てて彼女は織る、

細い糸のそして長い糸の、そして忽ち私たちの中に言ふ、

『若者たちよ、私の求婚者たちよ、神のやうなオデュッセウスが死んだのだから、

私との結婚をお急ぎですがお待ち下さい、織物を完成するまで、私の織り仕事が無駄に潰えないやうに、

勇者ラーエルティア^{モイ}の墓着、彼を

不吉な死の破壊的な定めがつかみ取る時の、

ここいら中のアカハイア女らの誰かが私を批難しないやうに、

覆い布もなしに横たはつたら澤山財を築いた人が、』

このやうに彼女は言つた、そして我々の男らしい心は同意した。

そこで晝間こそ彼女は大きい機を織つたのだつた、

そして夜になつてほどいた、炬火を傍に置いて。

このやうにして三年間彼女は手管によつてアカハイア人らの目を晦まし言ひくるめて來た

105

100

95

90

だが四年目がやつて来てそして春が来たとき、

その時こそ女たちの誰かが言つた、彼女はよく知つてゐた、

そして我々は彼女が輝ける機をほどいてゐるのを見附けた。

このやうにしてそれは彼女が不本意に終つた、止むなく、

そこで君にこのやうに求婚者一同は返答する、君も知つてゐるのだから

君自身君の心で、そしてすべてのアカハイア人らも知つてゐる。

君のお母さんを歸してやりなさい、そしてその男と結婚するやうに命じなさい

誰にでも父親が命じる男にそして彼女に氣に入る男に。そしてもしこれ以上アカハイア人らの息子らの多くの時間

間を困らせるならば、それらを心に思慮して、それらを彼女自身に添えて與へ

たアテヘーネーが、とても美しい仕事をする事が出来ることとして優れ

た心と賢さとを、それらは決して昔の女の人の誰についても

我々が聞いたことがないやうな風のもの、その女の人たちは以前にあた巻髪の宜しいアカハイア女

115

たち、

テューローとかアルクメーネーとか美しい冠のミユケーネーとか、

彼女らの誰も智識をペーネロペイアーと等しく知らなかつた、だがこの點に於て彼女は適切に知らなかつた。

だからその間は君の生活資材と財産とを彼らは食ひ續ける、

彼女がその心を持ち續ける間は、その心を彼女の胸に神々が置いた、大きな評判を彼女

自身に作り出しはしたが、だが君には澤山の資材の缺乏を作り出した。

それで我々は以前の土地へも行かないし他の土地へも行かない、

彼女がアカハイア人らの中の彼女が望むものと結婚するまでは、

すると彼に今度は賢いテレーマコホスが面と向かつて言つた、

「アンティノオスよ、どうして家からいやだと言ふものを逐ひ出して好からう

私を生んだ人を、私を育てた人を、そして私の父は他の土地にある、

生きてゐるにしても又死んでしまつたにしても、それに

130

125

120

澤山を拂ひ返すのは困難である

イーカリオスに、假に私自身が喜んで母を送り返すにして
ても。

といふのは彼女の父から酷い目に遭ふだらう、そして神
靈も他の禍を

下すだらう、母は恐しいエリニュースたちを祈り下すだ
らうから

家から出て行く時、そして私に人々から批難が

あるだらう、だからそんな言葉を決して私は口にしない。
それでももしあなた方の心がそれらのことに不満なものなら、
私の邸から出て行つて下さい、そして他の食事に加はる
とよい

あなた方の財産を食べて次々に家を替えて。

もしそれがあなた方に思はれるのならより好都合でより

好い

のだと、一人の男の蓄へを復讐を恐れずに滅ぼすのが、
食い盡すがよい、そしたら私は永遠にぬます神々にお絶
りしよう、

もし一體ゼウスが復讐の事をなすことをお許しなら、

一も二もなくその時はこの家であな方は滅びるだ
らう、

このやうにテーレマコホスは言つた、すると彼のため
に遠くに聲の届くゼウスは二羽の鷲を

145

高みから山の峯から飛んで來させた。

二羽はその時風の息に乗つて飛來した、
互ひに近々と翼と翼とを伸べて翔んで、

だがまさに聲が澤山ある集會の眞中に來た時、
そこで互ひに旋回しつつ翼を激しく羽搏いた、

すべての者たちの頭を見下ろした、そして眼で破滅を表
した

そして爪で兩頸のところの兩頬を引き裂いて

右へ彼らの家々と市とを越えて飛び去つた。

すると彼らは鳥に驚いた、兩の眼で見たのだから、

そして心に思案した何が成し遂げられるのだらうかと。

すると彼らに向つて老いたる勇者ハリテヘルセースが言

つた

マストリデースが、といふのは彼だけが同じ年頃の中で

秀でてゐたから

鳥たちのことを知ることと運命を語ることに、

彼は彼らによく考慮して發言し話し掛けた、

「今は私に耳を傾けられよ、イタハケー人らよ、私の言ふ
ことに、」

求婚者たちになかんづく意見を述べてこれらのことを言
ふぞ、

といふのは彼らに大きな禍が轉つて來ようから、つまり
もはやオデュッセウスは

160

155

150

長く彼の愛しい者らから離れてゐまいから、いやもうす
でに

近くに居てこれらの者らに殺戮と死とを準備してゐる、
これらの全ての者らに、そして他の多くの者らにも彼は
禍であるだらう、

はつきりと明らかなイタハケーに住む我々に、だからそ
のずつと前に

我々はよく考へてこんなことは止めるやうにしようでは
ないか、そして彼ら自身にも

止めさせようではないか、と言ふのは確かに彼らにとつ
てもそれがより良いのだから。

私は心得がなくて豫言をするのではないから、好く知つ
て言ふのだ

そして彼にとつて全ては成就されると私は言ふ、
彼が私が言つた通りに、イーリオスに向けて船に彼らが

乗り込んだとき
アルゴス人らが、彼らに交じつて智慧に富んだオデュッ
セウスも行つた。

私は言つた多くの苦難を蒙り、全ての部下を失つて
誰にも知られず二十年目に

家に歸り着くであらうと、それらが今や全て成就される
のだ。」

すると彼に再びエウリュマコホスが、ポリュボスの子

175

165

供が、言ひ返した

「老人よ、さあ行つてあなたの子供たちに豫言しなさい
家に歸つて、決して何か不幸なことを後で彼らが蒙らな
いやうに、

こんなことなら私があなたよりずつと上手に豫言します
よ。」

澤山の鳥たちが太陽の光線の下で
飛び廻つてゐる、全てが悪いことの前兆であるわけはな
い、またオデュッセウスは

遠くで死んだ、そんな風にしてあなたも又彼と一緒に死
んだ方が

よかつた、そんな風に神意を表はして言はれるな、
そして既に怒つてゐるテーレマコホスをそのやうに焚付
けなされるな、

あなたの家に贈物を期待して、彼が呉れるかと。
いやあなたに私ははつきり言つておくぞ、それは必ず實
現するであらう、

もしも若い人を昔の事を澤山に知りながら
言葉で焚付けて無理なことを仕出かさせるとは、
彼本人は先づ厄介なことになるだらう、

「どつちみち彼はこれらの連中の所爲で何もすることが出
来ないだらう。」

そしてあなたに、老人よ、罰金を我々は課すだらう、そ

190

185

180

れを心に
苦しむであらう拂ふことを、あなたに痛み多いことであ
らう。

さてテーレマコホスには皆の中で私自身が忠告しよう、
母親を彼女の父の所に歸るやう命じるがよい、

彼らが結婚を準備しそして婚資を用意するであらう
とても澤山の、愛しい子供に持つて行かせるにふさはし
いほどの。

といふのはそれ以前には止めないと思ふからアカハイア
人らの息子らは

痛み多い求婚を、何も全く我々は恐れないのだから、
テーレマコホスのことだつて、彼はいろいろと言葉多い
が、

神託のことだつて構はないぞ、それをあなたは、老人よ、
無意味に喋るが、もうすつかりうんざりだ。

そして又財産はひどく食い荒らされてしまつたらう、決
して見返りは

ないだらう、彼女がアカハイア人らを引き伸ばしてゐる
間は

彼女の結婚を、そして我々はまた毎日待つて
彼女の美點のために競つてゐる、そして他の女のところ

には
行かない、それらの女らはそれぞれに妻とするのに相應

205

200

195

しいのだが、
すると彼に今度は賢いテーレマコホスが答へて言つ
た、

「エウリュマコホスよ、そして他の人々よ、お歴々の求婚
者である限りの方々よ、

そのことについてはあなた方にもはやお願いすまいし言
ひもしまし、

既にそれは神々も他のアカハイア人らも御存知であるか
ら。

だがさあ私に迅い船と二十人の乗組員とを下さい、
彼らはここかしこと私の旅について來るでせう。

といふのは私はスパルテーにそして砂がちのピュロスに
行きますから、

歸還のことを尋ねて長い間行つたつきりの父の、
或いは死すべきものの誰かが私に言ふかも知れない、或
いはお告げを聴くかも知れない

ゼウスからの、それは最もよく人間に報せを傳へる。
もしも父の生存をそして歸還を私が聞くやうなら、

その時には疲弊し切つてゐるがもう一年我慢出来よう、
もしも死んだともうゐないと私が聞くやうなら、

その時には懐しい父祖の地に戻つて來て
彼の墓を築きその上に財寶を並べて弔はう

極めて盛大に、相應しい程、それから男に母を與へよう。」

220

215

210

まことにこのやうに言つて彼は下に坐した、すると彼らに向つて立つた

メントールが、彼こそは批の打ち所のないオデュッセウスのの従者であつた、

そして彼に船に乗つて行く際に家をつつかり委ねた、

老人に従ふやうにそしてすべてをしつかり護るやうに、

彼が彼らによく思案して發言し言ひかけた、

「今は私に耳を貸してくれ、イタハケー人らよ、私の言ふことを、」

誰にせよ決して前以て優しく寛大であることは出来ない標の杖を持つた王は、心に條理を持たずには、

いやいつも殘酷でありそして不正を働くこともあらう、

そんな風に誰かが神のやうなオデュッセウスを思ひ出す

だらうか

人々のうちの誰かが、彼らに彼は君臨してゐた、父のやうに優しくあつたではないか。

ところで全く以てふてぶてしい求婚者らのことなら私は

認めるにやぶさではない

彼らが心から曲つた謀みでひどい事をなしてゐると、

つまり彼らの首の危険を冒して滅茶苦茶に食ひ荒してゐる

る

オデュッセウスの家を、彼が歸るだらうとは今に彼らは

考へない。

235

いや今や他の人々に私は憤つてゐるのだ、そのやうに皆は

黙つて坐してゐる、そして少しも言葉で話し掛けない

少數である求婚者を大勢であるあなた方が止めさせるやうに、

「」

すると彼にエウエーノリデースのレイオークリトスが

言ひ返した

「兇々しいメントールよ、氣が狂つたものよ、何と言ふことを言ふのか

我々を止めさせるやうに唆すのか。だが難しいだらうよ

もつと大勢の人間にとつても御馳走をめぐつて戦ふこと

は。

といふのはよしんばイタハケーのオデュッセウスその

人がやつて来て

彼の家中で御馳走を食べてゐる尊い求婚者たちを

邸から逐ひ拂ひたいと心に思つたとしても、

彼を女は喜ばないだらう、とても會ひたがつてはゐるが、

歸つて来た彼を、いやその場で相應しくない運命に出遭

ふだらう、

もしより多勢の者と戦つたなら、それにお前は道理にか

なつて話してゐない。

さあ人々をそれぞれの仕事へと解散させなさい、

そしてこの男のためにはメントールとハリテヘルセース

245

250

240

が旅を進めるだらう、

彼らは彼にとつて最初からの父の友だちである。

だが、私が思ふに、長い間坐つて報せを

イタハケーで彼は聞くと思ふよ、その旅は決して實現し

ないだらう。」

このやうに喋つた、そしてすばやく集會を解散させた。

彼らはめいめい自分の家へと散つて行つたが、

求婚者たちは神のやうなオデュッセウスの家へ行つた。

テーレマコホスは離れて海の濱に行き、

両手を灰色の海で洗ひ清めてから、アテヘーネーに祈つ

た。

「私の言ふことを聞いて下さい、神であつて昨日私どもの

家へお出でになつたあなたよ

そして私に命じられた船に乗つて霧のかかつた海に行き、

長く行つたきりの父の歸還を尋ねに

行くやうに、だがその全てをアカハイア人らは妨げてあ

ます、

そして求婚者らがその最たるものです、悪く傲慢な彼ら

が。」

このやうに祈つて言つた、すると彼のすぐ近くにアテ

ヘーネーは來た、

メントールに似せて顔つきでも聲でも、

そして彼に聲を出して翼のある言葉を話し掛けた、

265

255

「テーレマコホスよ、これからは卑怯に馬鹿に振舞つて

はならない、

もし本當にお前の父が優れた心を仕込んだのなら、

そのやうで彼はあつた仕事と言葉とを實現するのに、

お前にとつてその時はこの旅は無駄なものでも成し遂げ

られないものでもないだらう。

だがもしお前が彼のそしてペネロペイエーの子供でない

のなら、

その時お前が望んであることを成し遂げるだらうと私は

望むまい。

といふのは少數の彼の子供らが父と同じであるのだ、

多數は父より劣る、そして少數が父より優れてゐる。

だがこれからはお前が卑怯に振舞はず馬鹿でもないのな

ら

お前をオデュッセウスの智慧は取落すまい、

お前にとつてその時はこの仕事をやり遂げる希望がある。

だから今や求婚者らの企みや考へは置いて置け

馬鹿な考へは、少しも賢くも正しくもないのだから、

彼らは少しも死と黒い宿命のことを知つてゐない、

まことに彼らに近くに彼ら全部が死ぬ日があることを。

そしてお前が望んでゐるお前の旅は長く延ばされてはい

けない、

といふのはそのやうなお前にとつて父親以來の友で私は

280

275

270

285

あるのだ、

その私はお前のために速い船を調べかつ私自身が一緒に
ついて行かう。

だがお前は家の方に行つて求婚者らと一座しなさい、
食糧を準備しなさいそしてそれを全て器に入れなさい、
酒を兩把手の壺に又大麥を、男たちの生きる力を、
目の詰つた革袋に、私は國中から漕ぎ手を
心進む漕ぎ手を急いで集めよう。船はある

澤山に海に圍まれたイタハケーには、新しいのも古いの
も、

それらの中からあなたのために一番良いのを私は選ぶ、
そして急いで艤装して廣い海に乗りださう。」

このやうにアテヘーナイエーは言つた、ゼウスの娘
は、するともはや長く

テーレマコホスは躊躇はなかつた、神の聲を彼は聞いた
のだから。

それで家に向つて歸つて行つた、己が心を悩ませながら、
そして何と見出したのだ彼の邸で求婚者たちが

中庭で山羊たちの皮を剥ぎ豚たちの毛焼きをしてゐるの
を。

するとアンティノオスが笑ひながらテーレマコホスの方
に眞直ぐに來た、

そして彼の手を握り言葉を言ひ名前で呼掛けた。

300

「集會で立派な口を利くテーレマコホスよ、氣持に於て
扱ひ憎いものよ、お前に更なる

悪い行ひや言葉が胸に萌さないやうにせよ、

いや大いに我らは食ひ且つ飲むべし、以前と同じやうに。
あれらのことを君のためにすつかりアカハイア人らはや

り遂げるよ、

船をそして選ばれた漕ぎ手を、早く着くやうに
聖なるピュロスに尊い父上の便りを求めて。」

すると彼に今度は賢いテーレマコホスが言ひ返した、

「アンティノオスよ、どうして出来よう不作法なあなた方
と一緒に

黙つて食事をしゆつくりと楽しむことは。

充分ではないか、以前からあなた方は多くのもの好いも
のを食べ盡した

私の財産を、求婚者たちよ、私はまだ幼かつたから？

今や私は大きくなつた、そして他の人々の言葉を聞いて
知つてゐる、そして私の心は内側で育つてゐる、

私はやつて見よう、あなた方に不吉な死を送るやうに、

或いはピュロスへ行き或いはそこから他の國へ行き。

私は行かう、私が言つてゐるのは無駄な道ではないだら
う、

便乗客として私は行かう、といふのは船と漕ぎ手たちの
の主には

315

310

305

ならないだらうから、さうしたことが今やあなた方の好都合であると見える。」

このやうに言つた、そして手をアンティノオスの手から引き抜いた

容易く、さて求婚者らは家中で食事^{いんちゆう}に忙しかつた。

彼らは言葉で嘲り面白がつた、

このやうに若くて無謀なものの誰かは言つたものだ、

「確かにテーレマコホスは我々の殺害を考慮してゐる。

或いは砂がちのピュロスから誰か助つ人を連れて来よう、或いは彼は又スパルターから、大變な勢ひで出掛けるから、

或いはエビヒュレーに行くつもりかも知れない、肥沃な土地に、

行くつもりかも知れない、あそこから命を破壊する薬を持つて来る氣で、

そして攪酒器に投げ込んで我々皆を殺す氣だ。」

そして他の若くて人も無げな者は又言つたものだ、

「誰が知らうか、彼本人が中空の船で行つて

親しいものの遠くで漂泊して果てるのかも知れないまさにおデュッセウスのやうに?」

そのやうにしての更なる厄介と彼はなるであらう我々にとつて、

といふのは財産はすべて我々が分けてしまはうし、家は

330

320

また

彼の母親に與へよう所有するやうにそして誰でも結婚するものに。」

このやうに彼らは言つた、だが彼は父の高く屋根を葺いた部屋に降りて行つた、

廣い部屋に、そこに金と青銅とが積まれてあつた

函に入つて布地が澤山の響はしいオリイヴ油が。

そしてそこには古くて甘い酒の大甕が

立ち並んでゐた、未だ混ぜられてゐない神のものなる飲み物を内に藏して、

壁に沿つてきちんと並べられて、もしかしてオデュッセウスが

多くの苦難の後に家に歸り着いた時のために。

その兩扉はびつたり合つた鍵が掛かる様になつてゐた、

二重の扉は、そしてそこに家政婦の女が夜も晝も

ゐた、彼女はすべてを用心深い心で見張つてゐた、エウリュレイアが、ペイセーノリデースのオープスの娘が。

その時彼女をテーレマコホスが部屋に呼んで話し掛けた、

「おつ母さん、さあ私に酒を兩把手の壺に注いで下さい甘い酒を、一番甘い酒の次のを、一番甘い酒はあなたが見張つてゐる、」

345

340

335

あの不運な人と思つて、還つて来たならばと

ゼウスに出づるオデュッセウスが死と運命とを逃れて。

十二の壺を満たしなさいそしてすべてを蓋で覆いなさい。

そして私のために大麥をよく縫はれた皮袋に注いでくれ

碾き割りの大麥の穀の二十メトラがあるやうにせよ。

そしてあなた一人が知つてゐてほしい。これら全部を一
緒にやつて置かれよ。

といふのは夕方私が受け取るのだから、さつしたなら直
ぐに

母が上の部屋に昇つて行つて寝られたらば、

といふのは私はスパルテーと砂がちのヒュロスに行くの
だ、

父の歸還を尋ねようと、聞くだらうかと。」

このやうに言つた、すると情愛深い乳母エウリュクレ

イアは叫び聲を擧げた、

そして泣き聲を出しながら翼のある言葉を言つた、

「どうしてあなたの、愛しい子よ、心の中にそんな考へが
入つて来たの？ 何處へ行かうと言ふのです多くの土地
の

たつた一人つ子で愛されてゐる子が？ あの方は祖國か

ら遠くで亡くなられたのですよ

ゼウスから生れたオデュッセウスは異國で。

365

360

355

そしてあの人たちはあなたが行つてしまはれたら直ぐに

後々悪いことを謀らむでせう、

あなたが企みで滅びるやうに、そして自分たちでこれら

全てを分けるでせう。

いいえ、ここに坐つてゐなさい自分の物の上に、しては

いけません

不毛な海の上を不幸に遭ひに彷徨することは。」

すると彼女は賢明なテーレマコホスが答へて言
つた、

「元氣を出して、おつ母さん、この計畫には神が關はつて
ゐない譯ではないのだから。

でも私の大好きなお母さんにこれを言はないと誓つて下
さい、

十一日目か十二日目になる前は、

或いは彼女が淋しがり出發したことを聞いた後に、
泣いて美しい肌をすっかり駄目にしないやうに。」

このやうに言つた、すると彼女は神掛けて言はないと
大きな誓ひを誓つた。

そして彼女が誓ひその誓約をなしたのち、

その後すぐさま彼のために酒を兩把手の壺に汲み出し、

そして彼のために大麥をよく縫はれた皮袋に注いだ、

それからテーレマコホスは家に行つて求婚者たちと同坐
した。

380

375

370

その時またも他のことを考へた女神燦めく眼のアテヘ
ーネーは

テーレマコホスに似せて市中到るところに行つた、
そして各々の人物に傍らに立つて言葉と言つた、
夕方に迅い船のところに集まるやうに命じた。

それから彼女はまたプフロニオスの輝ける息子ノエーモ
ーンに

迅い船を頼み、すると彼は彼女に快く引き受けた。

陽は沈んだそして全ての街路は翳つた、

その時迅い船を海に降した、そしてその中にすべての
索具を取り附けた、それらをよい漕座を持つ船が持ち運
ぶ。

そして港の一番端に繋いだ、するとその周りに勝れた乗
組員達が

一緒に集つた、すると女神は各々を勵ました。

その時又も他のことを考へ附いた女神燦めく眼のアテ
ヘーネーが

神のやうなオデュッセウスの家へ歩いて行つた、

そこで求婚者たちに甘い睡りを注ぎかけた、

そして飲んでゐる彼らを茫然とさせた、そして手から杯
を拂ひ落した。

彼らは立ち上がった市の到るところで寝るために、もは
や長く

395

390

385

坐つてゐなかつた、彼らの臉に睡りが落ちかかつたから。
それからテーレマコホスに話し掛けた燦めく眼のアテヘー
ネーは

よく住みなされた廣間から呼び出して
メントールに姿でも聲でも似せて、

「テーレマコホスよ、もはやあなたのためによい臍當の仲
間は

權を持つて坐つてゐる、あなたの出港の合圖を待つて、
さあ行きませう、旅を長く遅らせてはなりません。」

そのやうに言つてパルラス「アテヘーネーが先に立つた
急いで、するとその時は女神の足跡について行つた。

「そして船の所にそして海邊に來た時、」

その時濱邊に髪の毛を長くした仲間らを見出した。
そこで彼らにテーレマコホスの聖なる力が語り掛け

た、

「さあ、皆な、糧秣を運ばう、實は全ては既に

一纏めに廣間にある、私の母は少しも知らされてない、
他の女奴隷たちも、たつた一人が私の言葉を聞いた。」

このやうに言つて先導した、すると彼らは附き従つた。
そして彼らはすべてを運んでよい漕座を備へた船に

積んだ、オデュッセウスの愛する息子が命ずる通りに。
そしてテーレマコホスは船に乗り込んだ、アテヘーネーが
先に立つた、

415

410

405

400

そして船の艫に坐つた、そして彼女のすぐ近くに
テーレマコホスが坐つた、そして彼らは艫綱を解いた、
そして彼らも乗り込んで漕ぎ座に坐つた。

そして彼らにおあつらへのあつらう順風を送つた燦めく
眼のアテヘーネーが、

高く吹くゼプヒュロス^西を、葡萄酒色の海の上で吠える。
そしてテーレマコホスは仲間たちに激励して命じた
索具をつかむやうに、すると彼らは命じたことを聞いた。
縦の帆柱を中空の帆柱座の中に

持ち上げて立てた、そして前綱に結んだ、
そして白い帆を揚げたよく燃つた牛の皮で。

すると風が帆の眞中を膨らませた、そして周りでは波が
進んで行く船の舳の周りでは煌めく波が大きく歌つた、
「船は波を切つて急いだ旅路を全つしながら。」

そこで索具を速い黒い船に結びつけて
彼らは酒で縁まですれすれの攪酒器を据ゑた、
そして不死なる永遠に居ます神々に獻酒した、
全ての神々の中でもとりわけゼウスの燦めく眼の娘に。
一晩中そして曙にかけて船は旅を旅し續けた。

第二の歌了

第三の歌

さて陽は昇つた、とても美しい海面を離れて、

青銅に富む天へ、不死なるものを照らすために
また穀物を生み出す地上の死すべき人間らを照らすため
に、

そして彼らはピュロスに、ネーレウスのよく築かれた市
に、

来た、すると彼らは海の渚で犠牲式を執り行つてゐた、
眞黒な牡牛たちを、地を揺する黒い髪^{エリクツトアオンキョテカハイデー}の毛の神に。

九つの座所があり、五百人がそれぞれの座所に
坐つた、それぞれに九匹の牡牛が準備されてゐた。

彼らは内臓を味つてから、神に股骨を焼いた、
さて彼らは眞直ぐに下船して釣合ひのよい船の帆を
持ち上げて巻いた、そして船を舫つた、そしてそこから

彼らは行つた
そして船からテーレマコホスは歩んだ、そしてアテヘーネ
ーが先立つた。

彼に先づ言葉を掛けた女神燦めく眼のアテヘーネーが
「テーレマコホスよ、あなたはもはや恥ぢる必要は少しも
ないのだ、

といふのはその爲に海だつて渡つたのだ、聞かうため
父に關して、どこへ大地が覆つたのか又どんな運命に彼
は遭つたのか。

さあ今は眞直ぐに馬を馴らすネストールに會ひなさい、
我々は知らうどんな智慧を胸の中に彼が持つてゐるか。

我々は知らうどんな智慧を胸の中に彼が持つてゐるか。

そして船の艫に坐つた、そして彼女のすぐ近くに
テーレマコホスが坐つた、そして彼らは艫綱を解いた、
そして彼らも乗り込んで漕ぎ座に坐つた。

そして彼らにおあつらへのあつらう順風を送つた燦めく
眼のアテヘーネーが、

高く吹くゼブヒュロス^西を、葡萄酒色の海の上で吠える。
そしてテーレマコホスは仲間たちに激励して命じた
索具をつかむやうに、すると彼らは命じたことを聞いた。
縦の帆柱を中空の帆柱座の中に

持ち上げて立てた、そして前綱に結んだ、
そして白い帆を揚げたよく燃つた牛の皮で、

すると風が帆の眞中を膨らませた、そして周りでは波が
進んで行く船の舳の周りでは煌めく波が大きく歌つた、
「船は波を切つて急いだ旅路を全つしながら。」

そこで索具を速い黒い船に結びつけて
彼らは酒で縁まですれすれの攪酒器を据ゑた、
そして不死なる永遠に居ます神々に獻酒した、
全ての神々の中でもとりわけゼウスの燦めく眼の娘に。
一晩中そして曙にかけて船は旅を旅し續けた。

第二の歌了

第三の歌

さて陽は昇つた、とても美しい海面を離れて、

青銅に富む天へ、不死なるものらを照らすために
また穀物を生み出す地上の死すべき人間らを照らすため
に、

そして彼らはピュロスに、ネーレウスのよく築かれた市
に、

来た、すると彼らは海の渚で犠牲式を執り行つてゐた、
眞黒な牡牛たちを、地を揺する黒い髪^{エリクツトアノンキョテカハイデー}の毛の神に。

九つの座所があり、五百人がそれぞれの座所に
坐つた、それぞれに九匹の牡牛が準備されてゐた。
彼らは内臓を味つてから、神に股骨を焼いた、

さて彼らは眞直ぐに下船して釣合ひのよい船の帆を
持ち上げて巻いた、そして船を舫つた、そしてそこから
彼らは行つた

そして船からテーレマコホスは歩んだ、そしてアテヘーネ
ーが先立つた。

彼に先づ言葉を掛けた女神燦めく眼のアテヘーネーが
「テーレマコホスよ、あなたはもはや恥ぢる必要は少しも
ないのだ、

といふのはその爲に海だつて渡つたのだ、聞かうため
父に關して、どこへ大地が覆つたのか又どんな運命に彼
は遭つたのか。

さあ今は眞直ぐに馬を馴らすネストールに會ひなさい、
我々は知らうどんな智慧を胸の中に彼が持つてゐるか。

「あなた自身が彼に頼みなさい、眞實のところを言つてくれるやうに。」

そして彼は嘘を言はないだらう、といふのはとても賢明なだけだ。

すると彼女に今度は賢明なテーレマコホスが答へた、

「メントールよ、どのやうに私は行かうか、どのやうに彼に話しかけようか？」

私は全くきちんとした言葉に未経験なのです、

そして若者が年上の人に問ひ掛けるのは怖ろしいのです。」

すると彼に再び話し掛けた女神燦めく眼のアテヘーネーが、

「テーレマコホスよ、或ることもはお前自身が心の内で考へるであらう、

そして或ることもは神靈がはかるであらう、私は思はないよ、

お前が神々の好意なしに生れたとも育つたとも。」

このやうに言つてパルラス「アテヘーネーは先に立つた

敏捷に、それで彼は神の足跡を歩んだ。

そして彼らはピュロスの人々の集會場にそして座席が並んでゐる所に來た、

そこにネストールが息子らと坐つてゐた、そして周りに

30

25

20

は仲間らが

食事を準備しつづつ肉を焼きつづつ他の肉を串に刺してゐた。

そして彼らが客人を見た時、彼らは皆一齊に揃つてやつて來た、

兩手で歓迎してそして席に着くやう求めた。

眞先にネストリデースのペイシストラトスが近附いて來て

兩人の手を取りそして御馳走の傍に坐らせた

柔らかい羊毛に、海の砂の上の、

兄弟のトホラシュメーデースと彼の父との傍らに。

そして内臓の分け前を與へた、そして酒を注ぎ入れた

金の杯に、そして乾杯しながら言つた

パルラス「アテヘーネーに、山羊皮楯を保つ、ゼウスの御娘に、

「今はお祈り下さい、客人よ、主ボセイターオンに、

といふのはあの神の御馳走にあなた方はここに来て行き遭つたのだから。

そして灌酒して祈つた後、それがしきたりです、

その人にもそれから蜜のやうに甘い酒の杯を與へなさい灌酒するために、私は思ふからこの人も不死なるものらに、

祈ると、そして全ての人間は神々を必要とするのです。

だが彼はより若いのだ、私自身と同年者、

45

40

35

それだからあなたに先づ金の杯を私は差し上げませう。」

このやうに言つて手に甘い酒の杯を置いた。

するとアテヘーナイエーは賢く正しい男に喜んだ、彼女に真先に金の杯を與へたために。

そして直ちに大いに主ボセイダーオーンに祈つた。

「聽いて下さい、ボセイダーオーン。ガイエーオコホスよ、

決して滯つてはいけません

私たち祈つてゐるものらにこの仕事を成し遂げて下さることを。

ネストールに真先にそして息子らに名譽を與へてくださ

い、

そしてそれから他の人々にも喜ばしいお返しを

全てのビュロス人らにとても素晴らしい大儀のお返しを。

それから又テレーマコホスと私とに成し遂げて歸ることを、

その爲に私たちは來たのです。速い黒い船に乗つて。」

このやうにその時祈つたそして自身でも全てを成就し

たものだ。

そしてテレーマコホスに美しい兩把手の杯を渡した。

するとそのやうに同様に祈つたオデュッセウスの愛する

息子は、

そして彼らは肉の表側を焼いたそして引き抜いた、分け前を分けてとても榮れのある御馳走を食べた。

50

そして飲み物と食べ物の欲を追ひやつてから、

彼らに言葉を始めたグレーニエーの戦車乗りネストール

が、

「今やより適切だ。質ね問ふことが

客人たちに、彼らが誰であるのか、食べ物に満足して頂

いたのだから。

お客人よ、あなた方はどなたですか？ 何處から海の道

を帆走して來なされたか？

何か用事ですかそれとも目的もなく彷徨つてをられる

のですか

略奪者らが海の上を彷徨ふ様に、彼らときたら彷徨ふの

です

命を懸けて、禍ひを他國人に齎して？」

すると彼に再び賢明なテレーマコホスが答へた、

勇氣を奮ひながら、といふのはアテヘーネーその人が心

に勇氣を

置いたから、彼に行つたきりの父について尋ねるやうに、

「そして彼がよい評判を人々の間で得るやうに。」

「ネストールよネーレイアデースよ、アカハイア人ら

の大いなる譽れよ、

あなたは何處から私たちが來たかと訊かれる。それで私

はあなたにすつかり話させよう。

私たちはネーイオンの麓のイタハケーからやつて來まし

55

70

60

75

65

80

た

そしてその用件は私一個のもの、公のものではありませんせん、それをお話しませう。

私の父の廣く擴まつてゐる風聞を尋ねて來ました、聞くことがあらうかと、

神のやうな氣丈なオデュッセウスの、皆は言ひます彼はかつて

あなたと共にトロイアの市を戦つて略奪したと。

つまり他の者は全て、トロイア人らと戦つた限りは、

私たちは聞いてゐます、何處で各々がおぞましい死を死

んだか

だが彼については死でさへ不明になされたクロニオンは。

といふのは誰もてきばきと言ふことが出来ない何處で彼

が死んだか、

彼が陸で敵の男たちに殺されたのか、

それとも海の深みでアムピヒトリー⁽³⁾ターの波によつて死

んだのか。

その爲に今あなたのこの膝に私は來ました、ひよつとして

そのおつもりはなからうかと

彼のおぞましい死を語るおつもりは、もしもかつて御覽

になつたのなら

あなたの兩の眼で、または他の人から言葉をお聞きなら

90

他の漂泊つてゐる人から、といふのは特別に彼を不幸に

生んだのです母親が。

決して私を斟酌したり哀んで乗けないで下さい、

どうぞ私にすつかり話して下さいあなたが御覽になつた

通りに。

お願いします、もしかつて私の父が、強いオデュッセウ

スが、何かをあなたに

言葉をでも行ひをでも約束して果したのなら

トロイア人らの國で、そこでアカハイア人らが苦難を蒙

つた

そのことどもを今私のために思ひ出して下さい、そして

私に詐りなく話して下さい。」

すると今度は答へたグレーニエーの戦車乗りネストー

ルが

「おゝ親しいものよ、あなたは私に苦しみを思ひ出させた

から、それをあの

國で我々が蒙つた勇氣については恐れを知らぬアカハイ

ア人らの息子たちが、

船に乗つて霧のかかる海の上を

略奪品を求めて彷徨した限りの、その時はアキヒルウス

が指揮した、

又偉大なプリアモス王の町の周りで

闘つた限りの、そしてその時に優れた限りの者が死ん

100

95

105

だ

その時にアレースの鼻肩するアイアースが倒れた、そこでアキヒルレウスが

そこで又パトロクロスが、神に匹敵する智慧者が、

そこで又私の愛する息子が、同時に強くもあり恐れを知らない、

アンティロコホスが、走る速さに於ても戦士としても卓越した

我々が蒙つた他の多くの禍ひ、誰がそれらを

すべて語り得ようか死すべき人間のうちの誰が？

駄目だ假に五年六年あなたが滞在して訊いても、あそこで神のやうなアカハイア人らが蒙つた限りの不幸を

その前に厭になつてあなたは祖國に歸るだらう。

といふのは九年間彼らに我らは禍ひを目論み破壊し續けた

あらゆる策略で、だが遂に成就されたクロニオンは。

あそこでは誰もがかつて軍略にかけて並ばうと思はなかつた、極めては遙かに神のやうなオデュッセウスが立ち優つてゐたから

すべての策略に、あなたの父御は、もし本當に

あなたが彼の子息なら、驚きが私を捉へる見てゐる私を。といふのは話し方まで似てゐるから、あなたは思はぬだ

120

らう

より若い人がそんなにそつくりと話すとは。

あそこでまことにその間私と神のやうなオデュッセウスが

かつて集會でも參謀會議でも二つのことを言はなかつた、いや智慧でも慎重な謀り事でも一つの心を持つて

アルゴス人らに示したどのやうにしたら遙かに最もよいか。

だがプリアモスの險しい市を我々が略奪してからは、

「すると我々は船で行つた、ゼウスがアカハイア人らをばらばらにした、」

そしてその時こそゼウスは心に破壊的な歸還を謀り給うた

アルゴス人らに、少しも考へ深くも正しくも

全員がなかつたから、それで彼らの多くは酷い定めに遭つた

破壊的な強大な父を持つた燦めく眼の女神の怒りから。

彼女はまたアトレイデースたちにお互いの間に争ひを置いた。

それで二人は集會に全てのアカハイア人らを招集した、無駄に、そして秩序に従はずに、日没頃、

それで彼らは酒で酔ひ過ごしてやつて來たアカハイア人らの息子らは、

135

115

110

130

125

言ひたいことを言ふために、彼らが何のために軍勢を集めたのかと。

その時まことにメネラーオスはすべてのアカハイア人らに説いた

帰還を考へるべきことを廣い海の背の上の

だがアガメムnoonには全然喜ばれなかつた、といふのは彼は望んだ

兵士らを引き止めるべく聖なる大儀を行はんと、

あのアテヘーナイエーの恐ろしい怒りを宥めやうと、

馬鹿な奴、それを知らなかつたのだ、聴かれないだらうことを

といふのは永遠にゐます神々の心は急には變はらないから。

それで二人は刺々しい言葉を交はしながら

立つた、すると彼らは立ち上がった臍當を附けたアカハイア人らは

酷い物音と共に、そして二つの計畫が彼らに喜ばれた。

その夜を我々は過ごした險しく心に争ひながら

お互ひに、といふのはゼウスが酷いことの誤りを企んだから

そして曙に或る者ら我らは船を神のものなる海へ引き下した

財寶と深い帯をした女たちを我々は積み。

150

145

140

だが半分の者たちは残り留まつた

まだアトレイデースのアガメムnoonの傍に、兵士らの

牧者の、

そして半分は我々は乗り組んで漕ぎ出した、船はとても

速く

帆走した、ゼウスが大きい怪物のある海を平にした。

テネドンに至つて我々は神々に犠牲を行つた、

家に歸ることを望んで、だがゼウスは歸還を思はれなかつた、

残酷な神は、彼は再び二度目に酷い争ひを起こした、

それで一部の者らは兩方に向ふ船を引き返して行つた

思慮深い智略に富んだオデュッセウスの周りで、

再びアトレイデースのアガメムnoonに好意を示して、

だが私はかき集められた船らと共に、私に付き従ふ船ら

と共に、

逃げた、知つてゐたから、神靈が禍ひを企んでゐることを。

そしてアレースの伴テューデウスの息子も逃げた、そして仲間を奮起させた。

そして後になつて我々の後から金髪のメネラーオスが來た、

そしてレスボスで追ひついた長い航海について議論して

ゐる我らに、

165

160

155

巖の多いキヒオスの上を通つて行かうか、

プシヨリエーの島に向つて、キヒオスを左に見て、

或いはキヒオスの陰を風の吹くミマースに沿つて、

それで我々は神に徴しを見せて下さるやう求めた、する

と彼は我らに

示された、そして命ぜられた深海の眞中をエウポイアイ目

掛けて

横切ることを、一逸く禍から我々が逃れるやうに。

ヒュウヒュウ鳴る微風が更に吹き起こつた、そして船は

とても速く

魚に富む道を横切つた、そしてゲライストスに

夜のうちに連れて行つた、それでポセイダーオンに牡

牛の

腿を澤山捧げた、大海を横切つたので。

第四日目であつた、アルゴスで均衡の攝れた船を

馬を馴らすテューデーテースのディオメデーテースの仲間

らが

留めたのは、だが私はピュロスを目指し續けた、かつて

止まなかつた

順風は、最初に神が吹くべく送つてから。

このやうにして私は來た、愛しい子供よ、知らないで、

何も知らない

彼らのことは、アカハイア人らの内で救はれたものらも、

170

死んだものらも。

だが我々の邸内に坐つてゐて

私が聞いた限りは、當り前のことだが、あなたは聞くで

あらう、あなたに私は隠さない。

槍に熱心なミユルミドーン人らは無事に歸つたと言ふ、

彼らをアキヒルレウスの輝ける息子が率ゐた、

そしてピヒロクテテース、ポイアイースの輝ける息子も

無事だと言ふ。

そしてイードメネウスは全ての仲間をクレーテーに引き

連れた、

戦さを逃れたものたちを、すると海は彼から誰をも奪は

なかつた。

アトレイデーテースのことはあなた方は遠くに居られても聴

いて居られるであらう、

どのやうに歸還したかその彼にアイギストホスがおぞま

しい死を企んだか

だがまことにその彼は惨たらしく仕拂つた。

そのやうによいものだ死んだ男の子供が

残されることは、その彼が父殺しに復讐したから、

企み多いアイギストホスに、彼が彼の名高い父を殺した。

あなたも、親しいものよ、大層強くて大きいと私はあな

たを見るのだから、

屈強でありなさい、誰にせよ後に生まれたものがあなた

185

236

180

175

195

190

をよく言ふやうに。」

すると彼に再び賢いテーレマコホスが顔を上げて言つた。

「おおネストールのネーレイアデースよ、アカハイア人らの大いなる榮光よ、

全く本當に彼の人は復讐しました、そしてアカハイア人らは

彼の名聲を廣く傳へるでせう來たるべき人たちにも歌の種になるやうに。

私にも神々がそのやうな力を附與されますやうに、求婚者らにその酷い惡行に復讐するべく、

彼らは私に傲慢無禮に不法を働くのです。

だが私にそのやうな幸運を神々は紡いで下さらなかつた、

私の父と私とは、そして今や私はいづれにしても耐へねばならない。」

すると彼に今度は答へたゲレーニエーの戰車乗りネス

トールが

「おお親しいものよ、あなたは私にそれらのことを思ひ出させ語つただから、

人々は言ふあなたの母親のために大勢の求婚者が

邸内であなたの意に反して惡事をなしてゐると。

私に言ひなさい、自分から望んで言ひなりになつてゐる

210

200

のですか、それとも人々があなたを憎んでゐるのですか國中の人々が、神の聲に従つて。

誰が知らうかそのうちに彼が歸つて來て彼らの暴力に仕返しするだらうことを、

彼が一人であるにせよすべてのアカハイア人らと一緒に

あるにせよ？

といふのはあなたをあのやうに燦めく眼のアテーネーが鼻屑なさるおつもりなら、

そのやうにかつて榮光あるオデュッセウスをとてもよく面倒見られた

トロイア人らの國で、そこでアカハイア人らが苦難を蒙

つた、

といふのはいまだかつて私は見ないあのやうに神々が明からさまに鼻屑なさるのを、

そのやうに彼に明らさまに寄添つて立つたバルラス・ア

テーネーは

もしあなたがそのやうに鼻屑するおつもりで心に掛けられるならば、

その時には彼らの誰かは結婚を考へることを止めるであらう。」

すると彼に再び賢いテーレマコホスが顔を擧げて言つ

た、

「老人よ、私はその言葉が實現するとは思はない、

225

220

215

過大に仰しやるのだから、驚きが私を捉へます。私に私は望んでゐるがそれらのことが生ずることはないだらう、神々がそのやうに望まれやうとも。」

すると彼は今度は話し掛けた女神燦めく眼のアテヘー
ネーが、

「テレーマコホスよ、何といふ言葉がお前を齒の牆壁を逃れるのか。

容易なのだ神が望んだなら遠くからでも男を救ふことは。私だつたら望むだらう多くの苦難を苦しんだ後で、

家に歸つて歸還の日を見ることを、

歸るや我が家で殺されるよりは、そのやうにアガメムノ

ーンは

アイギストホスと彼の妻との謀みによつて殺された。

だがまことに普遍的な死をは神と言へども

鼻膺する男にであつても防ぐことが出来ない、何時だつて

長い死を齎す死の破壊的な運命モイラが捉へる時。」

すると彼女に再び賢いテレーマコホスが顔を擧げて言

つた、

「メントールよ、それらのことを言ふまい我々はそれらを氣にしてゐるのだが、

彼の歸還は現實ではない、いや既に彼に

不死なるものらは死と黒い定めケールを目論んでゐる。

240

だが今は他の言葉を質問し尋ねよう

ネストールに、彼は他の者らよりものの道理と譯とを知る、

といふのは三つの世代の人間を支配したと人々は言ふから、

私の見るに不死なるもののやうに見える。

ネストールよネレーイアデースよ、私に本當のことを

言つて下さい、

どのやうにアトレイデースは廣く治めるアガメムノーン

は殺されたのですか？

どこにメネラーオスは居たのですか？ どのやうな死を

彼に謀んだのですか

策略の多いアイギストスは、ずつと強いものを殺したの

ですから？

彼はアルゴスのアカハイアに居ず、どこか他のところに

人々の間を彷徨つてゐたのですか、それで彼は勇氣を奮

つて殺したのですか？」

するとその時彼に答へたゲレーニエーの戦車乗りネス

トルが、

「だからこそ私が、子供よ、すつかり眞實をお話ししよう。

實際御自分でもさう思はれるだらう、事はどう成り行つ

たことかと、

もし生きてゐるアイギストホスに邸内で來合せたなら

255

250

245

トロイエーから還つてアトレイデースが、金髪のメネラーオスが、
その時は死んだ彼の爲に地の上に盛り土を彼らは盛らなかつたであらう、
いや彼を犬たちと鳥たちが喰ひ盡したであらう
町から遠く野原に横たはつてゐる彼を、誰も彼を
哭さないであらうアカハイア女の誰も、大したことを目論んだのだから。
つまり我々はあそこで多くの戦さを成し遂げて
ゐたのだが、彼ときたら馬を肥やすアルゴスの奥地でぬくぬくとして
アガメムノーンの妻を言葉で大いに誑かしてゐたのだ。
そして彼女は最初はふさはしくない行ひをはねのけた、
女神のやうなクリュタイムネーストラは、善い心を持つてゐたから。
そして傍らに歌ひ手の男が居た、彼によくよく命じた
アトレイデースがトロイエーに出掛けるときに妻を護るやうに。
だが彼女を遂に神々の定めが摩くやうに強ひたとき、
その時だ彼を歌ひ手を離れ島に連れて行つて
鳥たちの餌にそして食ひ代になるやうに取り残した、
そして望んでゐる彼女を望んで自分の家へ連れて行つた。
そして多くの腿肉を神々の聖なる祭壇で燃やした、

270

そして多くの供物を吊した、織物と金とを、
大仕事をやつてのけてから、それをかつて心に望んだ以上に。
我々はいふとトロイエーから一緒に帆走して歸るところであつた、
アトレイデースと私は、お互ひに友情を見ながら、
だが我々が聖なるスーニオンに來た時、アテヘーナイの岬に、
そこでメネラーオスの舵手をボホイボス・アポルローンは彼の優しい矢で射て殺した、
走つてゐる船の舵を兩手で握つてゐる彼を、
オネートリデースのプフロンティスを、彼は人間たちの諸族に立勝つてゐた
船を操るのに、嵐が荒ぶときに。
それで彼はそこで止つた、道を急いでゐたのだが、仲間を葬るためそして葬儀を執り行ふため。
だがその彼が葡萄酒色の海を行つて
割つた船に乗つてマレイアーの險しい岬に
走り着いた時、その時聲が遠くに届くゼウスは恐るべきことを
目論んで、ひゆうひゆう鳴る風の息を注いだ
巨大な膨れ上つた波を、山に等しい。
そこで分斷して半分をクレーテーに送つた、

290

265

285

260

280

275

そこにはキュドニーアー人らが住んでゐたイアルダノスの流れの邊に

さて海に突き出した滑らかな険しい崖があつた
霧のかかる外海の中のゴルテューンの外れに

そこでノトスノトスが大きな波を左側の巖に立ち上げる、
パハイストスに向つて、小さな巖が大きな波を却ける、

船たちはそこに差掛つた、素早く破滅を避けた
男たちは、だが船たちを巖礁に打當てた

波が、そして五隻の船先を青黒く塗つた船を

アイギュプトスに押しやつた風と波とが運んで。

彼はそこで多くの食糧と金とを集めて

船と共に違つた聲を出す人々のところを漂泊してゐたが、
その間に家ではアイギストホスがこの悪事を謀らんだ、
アトレイデースを殺して、人々は彼の下に従へられた、

そして七年間黄金に富めるミュケーネを統治した、

そして八年目に彼の禍として神のやうなオレステースが

來た

アテヘナイから戻つて、そして父を殺した男を殺した、

「智略に富んだアイギストホスを、彼が彼の名高い父を殺
した。」

まことに彼は彼を殺してアルゴス人らに葬ひの御馳走を

振舞つた

怖るべき母親とそして卑怯なアイギストホスの、

310

するとその同じ日に雄叫び勇ましいメネラーオスが來た、

澤山の財寶を運んで、彼の船たちが荷を上げる限りの。

あなたも、友よ、長い間家から遠くにふらふらしてはな

らぬ、

財産をあなたの家の中の男たちに残して

そのやうに氣盡な、あなたの全てを彼らが食ひ盡くさな

いやうに

全ての財産を奪つて、そしてあなたは無意味な旅を來た

ことになる。

だがメネラーオスの處へ私はお薦めし望みますね

行かれることを、といふのは彼は新たに他處から歸つて

來た、

さういふ人々の處から、そこからは心に望めない

歸ることを、誰でもまつ嵐が吹拂つたから

そのやうに大きい洋上に、そこからは鳥たちでさへ

一年の内に還つて來ない、大きく凄まじいから。

さあ行きなさいあなたの船とあなたの乗組員と共に

だがもし徒歩で行かれたいなら、あなた用に戦車と馬と

がある、

そしてあなたの傍らには私の息子が、それらはあなたの

導きになるだらう

神々しいラケダイモンへの、そこに金髪のメネラーオ

スがある。

325

320

315

彼に御自分で頼むことです、眞實を言ふやうに、
彼は偽りは言はないだらう、大層賢いのだから。」

このやうに彼は言つた、さて陽は沈んで夕闇はすべて
の上に来たつた。

そして彼らに女神燦めく眼のアテヘーネーは語り掛ける
のだつた、

「老人よ、いや全くそれらのことを定めに従つて語られ
た、

だがさあ舌はちよん切つて、酒を混ぜなさい、
ポセイダーオンと他の不死なるものらとに

獻酒して寝ることを考へることにしよう、その時刻だか
ら。

すでに光は闇の下に行つたから、それに相應しくなく
長く神々の饗宴に坐つてゐることは、いや歸らう。」

とゼウスの御娘は言つた、すると彼らは話してゐる彼
女を聞き入れた、

そして彼らに傳令使らが水を手に注いだ、
そして若者が攪酒器を酒でなみなみと満たした、

そして獻酒用の數滴を注ぎすべての杯を満した、
そして彼らは舌を火に投げ込んで、立ち上がつて灌酒し
た。

それから彼らが灌酒して心が欲するほど飲んだ時、

その時だアテヘーナイエーと神に似るテレーマコホスは

340

335

330

二人とも中空なる船に歸りたいと望んだ、
ネストールはまた言葉を盡して引き止めた、

「ゼウスがそれを禁じられるだらう、そして不死なる他の
神々も、

そんな風にしてあなた方が私のところから早い船のどこ
ろに行かれることを

恰も全く衣類もない貧乏な誰かの所からやつに、
彼には夜具も毛布も多くは家がない、

自分のためにも客人のためにも柔らかに眠るために、
だが私のところには夜具と美しい毛布がある。

いやまことにこの人オデュッセウスの愛でられる息子さ
んは

船の後甲板に寝せられないぞ、何しろ私が
生きてゐるのだから、そして更に子供たちが邸に残つて

ゐる
客人を客あしらひするために、誰にせよ私の家にやつて
来る。」

すると彼に再び答へた女神燦めく眼のアテヘーネー
が

「よくぞそれを言はれた、愛しい御老よ、あなたにふさは
しい

テレーマコホスが従はされることは、さつすることはす
つと好いのだから。

355

350

345

さうだ彼は今はあなたに従ふであらう、寝るだらう
あなたの邸で、そして私は黒い船に

行かう、乗組員らを勇氣附けるために、そして一々のこ
とを言ふために。

といふのは彼らのなかで私は一人だけ憚りながら年長で
あるからだ、

他の者たちはもつと若い人々で友情によつてついて来た
のだ、

皆が心の大きいテレマコホスの同年者。

あそこで私は寝ませう中空なる船の傍らで、

今は、そして曙には心の大きいカウコーネスたちのとこ
ろへ

行きます、あそこに貸金が私にある、新しくも

小さくもない貸金が、だがあなたはこの人を、あなたの
家に来たのだから、

戦車とあなたの息子さんとで送つて下さい、彼に馬を與
へて下さい、

最も走るのに長けてゐるのをそして持久力で最も優れた
ものを。」

このやうに言つて立ち去つた燦めく眼のアテヘーネー
は

鬚鷲に似せて、驚きがすべてのアカハイア人らを捉へた。
老人は驚嘆した、眼で見たことを、

370

360

そして彼はテレマコホスの手を捉へて、名を呼び言葉
を言つた。

「愛しいものよ、あなたを身分の低い者とも力弱い者の
とも私は思はないぞ、

若いあなたにあのやうに神々が案内人として従つてゐる
からには、

つまりオリュムポスに住居をお持ちの方の内他の誰で
もなく、

ゼウスの御娘、略奪品を奪ひ去るトリートゲネイアーが、
彼女はあなたの素晴らしい御父上にもアルゴス人らの中
で譽れを與へて來られた。

さあ、女王よ、御慈悲を、私に優れた名譽を與へられよ、
私自身と子供たちと敬ふべき妻とに

さうすれば私もまたあなたに額の廣い當歳の牛を犠牲に
しませう、

手入らずの牝の、その牝牛を人はまだ軛の下に導かなか
つた、

それをあなたに私は奉りませう金箔を角に巻いて。」

このやうに祈つて言つた、すると彼の祈りを聴かれた
パラスニアテヘーネーが。

そこでテレマコホスと皆を連れて行つたゲレーニエー
の戦車乗りネスツールが、

息子たちと婿たちとを、彼の美しい家へ。

385

380

375

そしてその王の素晴らしい宮殿に着いた時、
彼らは順番に凭れ椅子や高椅子に坐つた、

そしてやつて来た彼らのために老人は攪酒器で酒を混ぜ
た

飲むのに好い酒を、それを十一年目に
女召使が開いたそして口紐をほどいた

その酒を入れた攪酒器を老人が混ぜた、そしてアテヘー
ネーに大層

獻酒して祈つた、山羊皮楯を保つゼウスの御娘に。

そして皆は獻酒して心が満足するほど飲んでから、
彼らは床に就かうとそれぞれの家路についたが、

ゲレーニエーの戦車乗りネストールは彼をそこに休ませ
た、

テーレマコホスを、神のやうなオデュッセウスの愛子を、
孔の開いた寢床に、よく窺するポルティコの下、

傍らには好いトネリコの槍を持つペイストラトスを、
男らの長を、

彼は彼の子供らの中でまだ獨身で邸の中に居た。
そして自分は又棟の高い家の奥まつた部屋に横になつ
た

すると彼のために添ひ臥しの家妻が寐床と寢臺とを準備
した。

さて早生れの薔薇色の指をした曙が現れた時、

400

390

395

寢床から起き出したゲレーニエーの戦車乗りネストール
は、

そして出て行つて坐つた磨かれた石の上に、
それらは彼の聳える扉の前にあつた

白い石は、油で磨かれてつやつや光つて、その石の上に
以前は

ネーレウスが坐つたものだつた、神に匹敵する助言者
が、

だが彼はすでに運命に殺されてアイデースに行つてゐた、
ゲレーニオスのネストールが又その時その上に坐つた、

アカハイア人らの護り手が、
標の杖を持つて、すると彼の周りに息子らが群れ集つた

部屋からやつて来て、エケヘプフロンとストラテイオス
と

ベルセウスとアレイトスとそして神に似たトホラシユメ
ーデースとが。

その時彼らのところに六番目にペイストラトスが来た
勇士が、

そして傍らに神に似たテーレマコホスを導いて坐らせた。
すると彼らに言葉を始めたゲレーニエーの戦車乗りネス
トールが、

「急いで私に、愛する子供らよ、願ひを叶へてくれ、
何しろ眞先に神々の内でアテヘーネーに私はお緋りしよ

415

410

405

うと思ふから、

この女神は神の豪華な食事に目に見える姿でいらつしやつた。

さあ一人は平原に牛のところに行くやうに、素早く

牝牛が来るやうに、牛たちから牛飼ひの男が逐ふやうに

又一人は心の大きいテレマコホスの黒い船へ

行つて全ての乗組員を連れて来るやうに、そして二人だけを残すやうに、

そして一人は又金細工師のラーエルケースにここに来るやうに

命じるやうに、牛の角に金を被せるために。

そして他のお前たちはここに一緒に留まりなさい、そして中に言ひなさい

家中の女召使たちに素晴らしい御馳走を一生懸命作るやうに、

座席をそして両側に薪をそしてきれいな水を持つてくるやうに、

このやうに言つた、すると彼らは皆忙しく立働いた、牛が来た

平原から、早い均衡のとれた船のところからやつて来た心の大きいテレマコホスの仲間が、そして鍛冶が来た

鍛冶の道具を手持つて術の窮極を、

430

金敷をそして槌とよく造られたやつとこを、

それらで彼は金を細工した、そしてアテヘーネーがやつて来た

犠牲式に参加するために。そして老人戦車乗りのネスト

ールは金を與へた、すると彼はその時牛の角に被せて

飾つた、供物を女神が見て喜ぶやうに。

すると牛を角を持つて連れて来たストラティオスと神のやうなエケハプフローンとが。

すると手洗ひの水を彼らにアレートスが花飾りのついた鉢に入れて

部屋から運んで来た、そして片手に大麥を持つた

籠に入れて、すると斧を戦に勇氣のあるトホラシユメーデースが

鋭い斧を手持つて傍らに立つた、牛を撃つべく。

そしてベルセウスが血受けを持つた、そして老人戦車乗りのネストールが

手洗ひと麥時き散らしを執り行つた、そして多くをアテヘーネーに

祈つた毛を切り取つてから、そして頭の毛を火の中に投げ込んだ。

そして彼らが祈つてそして大麥をばらまいた時、その時ネストールの息子、膽力すぐれたトホラシユメー

425

420

445

440

435

デーヌが、

すぐ近くに立つて一撃した、すると斧は筋を切り放した首の、そして牛の命は離れた、すると彼女らは叫び聲を擧げた

娘たちと嫁たちと貴ぶべき妻とは

ネストールの妻は、エウリュディーケーは、クリュメノスの娘たちの中の最年長者は、

その時彼らは廣い道のある大地から持ち上げて

保つた、するとペイシストラトスが首を切つた、人々の指導者が、

すると牝牛から黒い血が流れ、そして命が骨を離れた、直ちに牝牛を彼らは解體した、そして急いで腿肉を切つた

すべて作法に則つて、そして脂で包んだ、二層にして、そしてその上に肉を重ねた、

すると老人が薪の上で焼いた、そしてその上に煌めく酒を

灌いだ、そして彼の傍で若者たちが手に五又の戟を持つた、

そして腿肉がすっかり焼けそして彼らが内臓を味はつた後、その他の部分を彼らは刻みそして串で貫いた、

そして鋭い焼串を手で持つて焼き上げた、

さてその時までにはテーレマコホスを美しいポリュカス

460

455

450

デーが湯浴みさせた、

ネレーイアデーヌのネストールの末の娘が、

そして湯浴みをさせオリーブ油をたっぷり塗つてから彼の周りに美しいマントと長着とを着せ掛けた、

風呂から彼は姿において不死なるものに等しく歩んだ、そして彼はネストールの傍らに行つて坐つた、人々の頭

の傍らに、

さて彼らは表側の肉を焼いてそして引き抜いた時、坐つて食べた、すると立派な男たちが給仕をした

葡萄酒を金の杯に酒注ぎして、

そして飲み物と食べ物の欲を追ひ拂つた時、

彼らに言葉を始めたゲレーニエーの戦車乗りネストールが、

「私の子供らよ、さあテーレマコホスのために鬘の美しい馬たちを

連れて来て車の下に繋ぎなさい、旅をすることが出来るやうに。」

このやうに言つた、すると彼らは彼の言葉を聞くや従つた、

大急ぎで車の下に足の速い馬たちを繋いだ、

そして女中頭が穀物と葡萄酒とを中に積んだ

焼肉も、ゼウスが育んだ王たちが食べるやうな、

さてテーレマコホスは乗り込んだとても美しい座席に

460

475

470

465

傍らにネストリデースのペイシストラトスが、兵士らの

長が、

座席に乗り込みそして手綱を手に握つた、

そして驅るべく鞭打てば、一匹は濞々ところではなく飛

んだ

平原に、そしてピュロスの險しい市を離れた。

そして彼らは一日中首の周りの軛を揺すり續けた。

陽は沈み全ての路は翳つた、

彼らはペヘーライにやつて来たディオクレースの家へ、

オルティロコホスの息子の、彼をアルベヘウスが子供と

して生んだ。

そこで彼らは夜を過ごした、すると彼は客人への贈物を

與へた。

さて早く生れる薔薇色の指をした曙が現れた時、

馬を彼らはとも美しい車に繋いで乗つた、

「そして玄關からよく訝するポルティコから乗り出し

た。」

そして驅るべく鞭打てば、一匹は濞々どころではなく飛

んだ。

そして麥を産する平原に彼らは来た、そこでそれから

旅を完うした」といふのはそのやうに迅い馬たちが知ら

ず知らずのうちに運んだから。

陽は沈み全ての路は翳つた。

第三の歌 了

第一の歌

註(1) 「彼」はテレマコホスのこと。アテヘーネーは初めからテレマコホス鼻屑である。

九五行目

第二の歌

註(1) テューローはエリス王サルモネウスの娘、ポセイドーンによつてペーリアスとネーレウス(従つてネストールの祖母にあたる)を生み、夫クレテヘウスによつてアーエーソーンとペヘーレウスとアミュンタハーオーンを生んだ。アルクメーネーはアマピトリューオーンの妻、ゼウスによつてヘーラクレスを生んだ。ミュケーネーはミュケーネーといふ地名の元祖、イナクフスの娘、アルゴスの母、ヘンオドスが觸れてゐる。

一一〇行目

第三の歌

註(1) 第三の歌九五行目と全く同じ一行である。そしてここでは全く必要ない。ほとんど全ての寫本で削つてゐる。

七八行目

(2) ポセイドーンの妻。

九一行目

495

490

485

例言

四十九 ホメーロス輪讀會は一九九九年六月一日に、一九八三年五月十日に讀み始めてから十七年目にイーリアスを讀み了り、その日の内にオデュッセイアに突入した。それから二年半、現在(二〇〇二年一月二十二日)はその第六の歌の半ば(一五七行目)に來てゐる。來年度すぐに第七の歌に入ることであらう。二〇〇一年の六月二十六日に第五百回の輪讀會を祝つてシャンパンで乾杯した。

五十 ここに出したオデュッセイア第一の歌から第三の歌を我々は一九九九年六月一日から二〇〇〇年十一月十五日までに、一年半かかつて讀んだ。イーリアスとオデュッセイアとの調子の違ひに我々は随分面喰らつたのであつた。今はそれにも少し馴れた。

五十一 長くフランスに行つてゐたッが二〇〇一年四月に歸つて來て、我々は元氣附いてゐる。